

『俳諧玉言集』 秋之部下 翻刻 杉田 美登

六十丁

鳥獸

笈日記、田中の法蔵寺にて

効あつや早稲かたかたの鳴の聲 笈日記 句集 貞享元 泊船 句撰
棧や先おもひいつ駒むかへ さらしな紀行 句撰

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寝かな 泊船集 句集貞享四 句撰 続虚栗

○此の句は、海士の屋は小海老になしたる。いとと哉といふ句と同
時の句也。

消息之部に出。句集、元三 泊船 句撰 猿蓑

稻雀茶の木の畑や逃処 句集元四 泊船 句撰

○此の句笈日記には、草の戸をしれや穂蓼に唐からし といふ句
と並び出せり。

老の名のとも知らて四十雀 続ざるみの 許六消息 句撰 句集元六

泊船 あらま記
此では、里、ズニ又ズシテ

榎の実散る鶉の羽音や朝あらし 句撰元六 泊船ト句撰に

初嵐

目にかかる雲やしはしのわたり鳥 句集元七 拾遺

ひいとなく尻声かなし夜の鹿 句集元七 泊船 句撰

杉風へ消息にあり

此の句笈日記に、元禄七年九月八日伊賀を旅立て笠置より舟にて其
夜奈良へ着。猿沢の池の辺に宿とり其夜すくれて月あきらかに、鹿も
声々に乱て哀れなれば、月の三更の頃猿沢の池の辺に吟行す。ひいと
なく尻かなし夜の鹿とあり。

木つゝの柱をたゞく住居かな 古せん 拾遺

此短冊、藤堂与三郎所持といふ。

世渡りやわたりくらへてわたりとり 後拾遺

秋

見たせば眺ればみれば須磨の秋 延宝・天和の頃 あらま記 句撰

此は三つともに、たらはのば也と。 一葉に百韻

秋十とせ却りて江戸を指す故郷 野さらし 句集 句撰 神前
此松の実はへせし代や神の秋 かしま詣

六十一丁

田家

かりかけし田つらのつるや里の秋 かしま詣

是は、さらしな行脚の時の句也と、其所に申し伝ふ。

秋の色ぬかみそつほもなかりけり

送られつ別れつ果は木曾の秋 さらしな紀行 あら野 笈日記 あらま

句空へ消息あり。俳家奇人談に句空之為にいへりと云。

記 泊船 句撰

糶汰 ジンダ。

此つは、二つ共にての活たる也。

ある草庵にいざなはれて

○後拾遺に、兼好の讚とあり。一葉には庵にかけんとて句空の書かせける兼好の旅にとあり。○あらまきには、徒然草に後世をおもはん者は、糶汰瓶一つも持まじきよし語ひけるをもてなるべしとある。

秋すゝし手毎にむけや瓜茄子 附合集 句集 句撰

一本に初五文字、残暑しはし、泊船には秋さひし。

旅懐

小名木沢の桐溪興行

此秋は何て年よる雲に鳥 句集元七 泊船 あらまき

秋にそふて行はや末は小松川 句集元六 泊船句撰

秋ふかき隣は何をする人ぞ 句撰 泊船 句撰拾遺

車庸亭二句 笈日記に九月二二日頃のやふに見えたり。

そ、疑ぞ

秋の夜を打崩したる嘶かな 句集元七 泊船 句撰

一葉集に、此句は菊月二十一日潮江車庸亭にして歌仙あり。同書に

句は、あるしは夜遊ぶことを好みて朝寝せらるる人也。宵寝いやく

朝起はせはし。おもしろき家の朝寝や亭主ふりとあり。

○笈日記に今日は九月二八日の夜なれば、秋の名残をおしむとて七種に恋を語題にして、おのおの発句あり。中略明日の夜は芝柏か方のまねきおもふよしにて、発句つかはし申されし其の発句、秋ふかき隣は何をする人ぞ。

何くふて小家は秋の柳陰 句集追加

幻住庵

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空 拾遺 古せん

旅癖や寝冷煩ふ秋の山 もとの水

信濃なる坂木の横吹といふ所に乞食のいなたるを見て、

さらてさへ秋に野寺の一つ鐘 もとの水

おきなおき起は浮世の秋を見ん

夜歩行にから櫓の音や裏の秋 後拾遺

秋さひし編笠着たる人の形

後拾遺

くろくろ

霧しくれ富士を見ぬ日そ面白き

野さらし 句集 句撰

西行谷

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

野さらし 句集 句撰

千里か旧里

綿弓や琵琶に慰む竹の輿

野さらし 句集 句撰

物書て扇引きさく余波哉く あらまき

あらまきに、松岡の茶店にての句也と。

をくの細道、消息の部

越後国能生神社汐越之名鐘 文章の部に出

内宮はことをまさりて外宮の遷宮拝み侍りて

たふとさに皆押合ぬ御遷宮

曲水亭にて題夜寒

乳麵の下焼立る夜寒かな 泊船集 句撰

○此句葛の松原に、此句は曲水亭にて、夜寒といへる題の句也。さるを大和の国三つ山の麓に旅寝の比時此句申されしよし。都の方より吾

妻路聞よとて人々もてはやしける也とあり。

草庵二句 一句は上の草の部に出す。道細しの句也。

ひやひやと壁をふまへて昼寝哉

句集元禄七 句撰

草庵二句 一句は上の草の部に出す。道細しの句也。

○一葉に粟津庵にて残暑の心をとあり。

泊船夏の部に出。

手にとらは消ん泪そあつき秋の霜

野さらし 文章之部 句集 句撰

新菊の出そめて早きしくれ哉

拾遺に冬の部に出たれと、冬ならば早きノ字入れまし。

不朴亡母追善

水向てこととひ給へ道明寺

拾遺に夏の部に出したれと句集には、秋とす。

甲州産屋ヶ崎

雲霧の暫時百景を尽しけり 一に、雲霧に

嵐雪の四国へ渡る時

旅からす二百十日も船支度　もとの水

みちのくにて　一葉に、俱利伽羅や三度起きても

くりからや三度起ても落し水

みちのく行脚は夏なるに、落とし水の句は不審也。

高瀬の漁火といふ題をとりて

篝火にかしかや浪の下むせひ　句集追加

○卯辰集に、山中十景高瀬漁火、いさり火やかしかは浪の下むせむとあり。

東西夜話に支考ノ曰、此句ノ評、漁火におとるかす魚はあまた有なから、むせふといふ一字をよせていはし。河鹿・小海老の外有べからずと云々。

萍やしかも山田の落とし水　後拾遺

温泉の名残今宵は肌の寒からん　後拾遺

江避けありもやすらん富士の湖　拾遺

秋の暮　行秋

憶老杜

髟風を吹て暮秋嘆ずるは誰子ぞ

みなし栗　句集　泊船

あらまき　風髟を吹いてとあり

死もせぬ旅寝の果よ秋の暮　あらまき、木曾の秋　野さらし

枯枝に鳥ののとりりけり秋の暮　附合集　古せん　泊船　句撰

雲竹自画に賛

こちらむけ我もさびしき秋のくれ　文章之部　句集元三　泊船集　句撰

二十六日きよ水の茶店に遊吟して泥足の集の伴諧あり。連衆十二人。

此道や行く人なしに秋の暮　句集元七　泊船　句撰

此二句笈日記に、此二句の間、いづれをかと申されしに、此道や行ひとなしにと、独歩したる所、誰かその後にしたがひ候半とて、是に所思といふ題をつけて、半歌仙侍りと云々。附合集に、此半かせん出て連衆十人なり。ここには十二人とあり。

おなじ時あるじの男のふかく望れるに

松風の軒をめぐりて秋のくれ　あらまき　句撰

泊船集に、大坂清水茶店四郎左衛門にてとあり。

六介・六兵の二人、はせを庵を訪れて古郷の安否を聞く

幾千里へたつおもひや秋の暮　もとの水

六四丁

船頭の尻声さむし秋の暮　もとの水

行秋や身に引まとふ三布蒲団　句集元二　泊船　句撰

行秋の猶たのもし青蜜柑　句集元五　泊船　句撰

行秋や手をひろげたる栗の毬　句集元七　泊船　句撰

笈日記に、元禄七年九月四日、伊賀の山中草庵にての作のよし。

句集、旅のものうさもいまたやまさるに、七月六日になれば伊せの遷
遷官拜まむと又舟にのりて

蛤のふたみわかれ行秋ぞ 細道 句撰 古せん

泊船集に元禄二とせの秋みのゝ国大垣よりいせのせんくうにまかり
て侍りし時、ふねの中にておくりける人に申たる句。

追加

寛文・延宝・天和年中

秋来ぬと妻乞星や鹿の皮

水学ものりものかさす天の川

月弓や婿の一芸男七夕

七夕のあはぬこゝろや雨中天

蜘蛛と音を何と啼く秋の風

於君崎

松なれや霧えいさらいとひくひくほとに

寝たる萩や容顔無礼花のかほ

よるへをいつ一葉に虫の旅寝して

月にしるへこなたへいらせたびのやと

六五丁

二十日過出るや名残三日の月

影は天の下てるひめか月の顔
実や月間口千金の通町

色つくや豆腐に落てうす紅葉

秋かせのやり戸の口やとかり声

これもまた水生木やもみち鮒

鍼立や肩に槌打から衣

武蔵野や一寸ほとな鹿の声

萩の声こや秋風の口うつし

文ならぬいろはもかきて火中哉

後家の秋物のあはれをとゝめたり

霧の旅それらてはなし秋の暮

雨の日や世間の秋を堺町

とらへたき声はかり見る芦間哉

ひれふりて牝鹿もよるや牝の島

夜儿窃に虫は月下の栗を穿ツ

愚案するに冥途も斯や秋の暮

重陽

さかつきの下ゆく菊や朽木盆

貞享・元禄中

悦堂和尚の隠家にまねかれて

香を残す菊帳菊のやちりかな

朝な朝な手習すゝむきりきりす

散柳あるしも我も鐘を聞く

俳家奇人談に此句は翁、加州柳陰軒句空亭に旅寝之時の吟也と。

三日月やはや手に障る草の露

声消て北斗にひよく砧かな

考証

悼仙風

手向けり芋は蓮に似たるとて

春海長老我草の戸にて身まかり侍るを葬て

何事もまねきはてたる芒かな

武蔵野の月の水生や松島の種

夕かほやかひまはるほと秋は来ぬ

一草庵の席上饗応を出して

しら露のさひしき味をわするゝな

米のなき時は瓢にをみはへし

人に米をもらひて

世の中は稻刈ころか草の庵

鮭馬の影見む関のわたし舟

嵐雪におくる

さひしさを問てくれぬか桐一葉

明月や西にもほしき窓ひとつ

秋のくれ客か亭主か中柱

此吟は、井伊侯の東都の邸に許六の在勤せしを尋ね玉也し時許六家にあらざれば、帰るを待ち玉の内の吟と語り伝ふ。其中柱今も存在すと云をききて、予井伊侯の臣岡田某に尋ねければ、其の柱は先年抜きて彦根へおくらるといへり。